

近世ベトナム北部地域における仏典刊行事業

その他のタイトル	Publishing project of Buddhist wooden block scriptures in Northern Vietnam in the early modern times
著者	宮嶋 純子
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	53
ページ	A155-A172
発行年	2020-04-01
URL	http://doi.org/10.32286/00020452

近世ベトナム北部地域における仏典刊行事業

宮 嶋 純 子

Publishing project of Buddhist wooden block scriptures in Northern Vietnam in the early modern times

MIYAJIMA Junko

During the 17th and the 18th centuries, the interactions between Buddhists in the southern part of China and those in Vietnam became more active. Buddhist scriptures brought to Vietnam during this period and those issued in Vietnam until the early 20th century were often reprinted. These scriptures greatly contributed to the formation of Vietnamese Buddhism. This study explores the history and features of publishing Buddhist scriptures in Vietnam by analyzing “A guide to three sutras of Buddhism” and “A history of Chinese Buddhism.” The findings reveal that Chinese Buddhist scriptures were not only reprinted, but they were also considered as important materials of unique value.

キーワード：ベトナム仏教史 (History of Vietnamese Buddhism)、仏典刊行
(Publishing of Buddhist scriptures)、『仏祖三経』 (*A guide to three
sutras of Buddhism*)、『仏祖統紀』 (*A history of Chinese Buddhism*)

はじめに

ベトナムにおける木版印刷は、後黎朝の15世紀頃から開始された¹⁾。明・成祖の勅命により永楽十五年(1415)に刊行された『四書大全』は、早くもベトナム覆刻版が太宗の紹平二年(1435)に完成した²⁾。同じく聖宗の光順八年(1467)、『五經大全』がハノイ国子監に下賜された³⁾。印刷事業は特に17-18世紀以降に盛んとなり、中国から輸入した経書や史書、曆書等の多種多様な典籍の他、ベトナム人自身の著作が、漢字や民族文字である字喃(チュノム)を用いて刊刻され、現存する版本もほぼこの時期以降のものである。

ベトナムではまた、非常に多くの仏教典籍も刊行された。大部分は中国から伝来した仏典をベトナムで新たに開版したものであるが、字喃で書かれた註疏本や仏教入門書等のベトナム撰述典籍も流通していた⁴⁾。他の典籍と同様に、仏典も現存するものは大部分が17-18世紀に刊行、或いはその後20世紀初頭にかけて再刊された版本である⁵⁾。

仏典の印刷刊行についていえば、ベトナムの状況は他地域に比して特殊であることが指摘されている。すなわち、中国や朝鮮半島・日本では、大蔵経が国家の援助や巨大寺院の主催のもと刊行されたが、ベトナムでは、大蔵経のような大部の出版は行われなかった。各地域における主要寺院が主体となり、僧俗の喜捨を原資とした、民間での小規模な出版活動が幅広く行わ

1) 以下、ベトナムにおける漢籍の流通や出版の歴史の概要については、張秀民『中国印刷術の発明及其影響』(北京人民出版社、1958年)、劉玉珺『越南漢喃古籍的文献学研究』(北京中華書局、2007年)、陳益源『越南漢籍文献述論』(北京中華書局、2011年)等の諸書を参照。

2) 『大越史記全書』本紀実録、黎太宗「〔紹平二年十二月〕新刊四書大全板成。」

3) 『大越史記全書』本紀実録、黎聖宗「〔光順八年四月〕頒五經官板于国子監。従秘書監学士武永禎之言也。」

4) 例えばベトナム仏教史に関する最も古い史料である『禪苑集英』は、後黎・裕宗の永盛十一年(1715)版本と阮・嗣徳十二年(1859)年の版本が伝わっている。本書の正式名称は『禪苑集英語録』二巻、撰者不詳。北宋初期に編纂された中国禪宗の灯史『景德伝灯録』に範をとった、6世紀末から13世紀初頭にかけてベトナム北中部で活動した禪師80名余り(名前のみ記載の僧を含む)の伝記集。成立年代は14世紀前半と見られる。

5) ベトナム刊行仏教典籍に関する目録には、陳文理輯『河内遠東考古学院現蔵越南仏典略編』(東京国際仏教教会、1943年)があり、17世紀から20世紀初頭にかけて刊行された約430部が載録される。また総合的な目録として劉春銀・王小盾・陳義主編『越南漢喃文獻目録提要』(台北中央研究院中国文哲研究所、2002年)及び同書補遺(2004年)があり、本目録の「子部・仏教」部には、約300部のベトナム刊行仏典が載録される。これらは漢喃研究院・国家図書館等の研究機関の所蔵典籍であるが、他にも各寺院が独自に所蔵する典籍や、近年ベトナム国内で関心が高まっている木版本が存在し、個別に目録が公開されているものもあるが、未調査・未公開の資料も多い。従って現時点でベトナム刊行仏典の全容を把握するのは非常に困難であるといえる。

れたのである。現存する諸本がごく一部を除いて公刊されていない⁶⁾ こととも相俟って、大蔵経所載の典籍利用を中心とする従来の東アジア漢文仏教の研究史上においては、ベトナム刊行仏典の存在自体がほぼ認識されず、研究への利用も非常に限定的である⁷⁾。

上述の刊行状況の他にも、ベトナム刊行仏典の特徴として、序文や跋文・慕縁記（芳名録）等の分量や内容が充実しており、個々の典籍の刊行の背景や重刊の際の状況について豊富な情報を提供していることが挙げられるが、その詳細な分析はこれまでほとんど行われてこなかった。本稿では、特に中国嶺南地域との関係が密接であったベトナム北部地域の仏教界における17-18世紀以降の仏典刊行事業について述べると共に、ベトナム版『三経日誦（仏祖三経）』や『仏祖統紀』を具体例として、ベトナム刊行仏典の特質について論じる。

1 明清代仏教經典のベトナム将来——『仏祖三経』の流伝

(1) ベトナム仏教の復興

北宋初期に最初の刊本大蔵経である開宝蔵（宋版大蔵経）が開版されると、中国国内の大寺院だけでなく、間もなく東アジア諸国にも下賜された⁸⁾。開宝蔵は、太平興国二年（977）に版木13万余枚が完成、卷子5千余巻から成る一大仏教叢書である。ベトナムには景德二年（1005）、前黎朝の創始者黎桓の請により、大蔵経が下賜されたことが『宋会要』巻197等に見える。ベトナムでは李朝の成立（1009年）以後も数次にわたって宋に遣使し、大蔵経を求めた⁹⁾。開宝蔵の後も、中国歴代王朝の下で幾度も大蔵経が開版され、また東アジア諸国ではそれらの将来に努めると同時に、中国に倣って大蔵経の印刷刊行が行われた¹⁰⁾。

6) 現在のベトナムにおける歴史資料の出版は、現代ベトナム語による訳注研究の形が主であり、漢文や字喃による原文を付さない場合が多い。特に仏教関係の文献については、前掲注4『禪苑集英』等の著名な一部を除きほとんど公刊されておらず、本論文で取り扱うような20世紀以前の版本資料が研究に直接利用されている。そのため、これらの資料については基本的にハノイの漢喃研究院に代表される現地所蔵機関での閲覧が必要となるが、近年はオンラインでの画像データの公開も少しずつ進められており、国外からの利用も可能となっている。本論では以下、引用資料について所蔵元と整理番号を注記する。

7) 関連する研究として、大西和彦「近世ベトナム仏教界と広州海幢寺」（『佛教史学研究』27巻2号、1985年、69-94頁）、増尾伸一郎「ベトナムにおける偽経と善書の流伝——仏道儒三教と民間信仰の交渉をめぐって」（『アジア遊学：「偽」なるものの「射程」——漢字文化圏の神仏とその周辺』東京勉誠出版、2013年、56-85頁）等が挙げられる。

8) 開宝蔵は、太平興国八年（983）、日本の入宋僧奝然に下賜され、淳化元年（990）には成宗治下の高麗にも将来された。

9) 川上正史「宋勅版蔵経安南伝来考」（『支那佛教史学』7巻1号、1944年、59-62頁）。

10) 例えば南宋以降清に至る各朝における諸大蔵経や、11世紀に開宝蔵を覆刻し、また13世紀に再雕した高麗大蔵経、江戸時代初期（17世紀）に開版された寛永寺版や黄檗版大蔵経がよく知られている。

一方、ベトナムにおいては、前述の通り、仏教典籍の木版印刷自体は盛んに行われたが、それらはすべて単行の經典であり、大藏經は刊行されなかった。現存するベトナム刊行仏典の大半を占めているのは、中国明清時代の仏教典籍の再刊本である。それらの底本は、当時、ベトナムへ南遊した中国南方出身の僧や、嶺南地域へ留学したベトナム僧たちによって将来された。李・陳朝期（1009-1400年）に帝室の保護と尊崇を受けて最盛期を迎えたベトナム仏教は、属明期（1413年-）から後黎朝（1428年-）にかけて朱子学が本格的に導入されると、仏教界自体の腐敗墮落が問題視されたこともあり、教団への統制が次第に強まった。

衰退の一途を辿るベトナム仏教界であったが、17世紀に入ると復興の機運が高まってくる。莫登庸による帝位の篡奪（莫朝、1527年-）を経て再興（1532年）された後黎朝の実権を握ったのは、莫氏勢力の放逐に功績のあった鄭氏と阮氏であった。後黎朝の皇帝を推戴する鄭氏はハノイを中心とする北部地域を実質的に支配し、阮氏はフエを中心とする中部地域に独立勢力を築いた（阮氏広南国）。両勢力の対立抗争は17世紀に入り本格化し、18世紀後半に西山党が蜂起し後黎朝が滅亡（1789年）するまで続いた。このような混乱期においてベトナム仏教が復興に転じた背景として、鄭氏一族と阮氏一族がいずれも仏教を信仰し教団を保護したことが挙げられるが、もう一つの要因として、次節以下に述べる中越間の仏教交流の盛行が挙げられる¹¹⁾。

(2) 拙公・明行両禪師の南遊と教化活動

ベトナム仏教が復興され、特に現代に至るまでのベトナム北部地域の仏教の基礎が実質的に形成されたのは、17-18世紀のことである。この時期に、福建省出身の拙公禪師（1590-1644）や弟子の江西省出身僧・明行禪師（1595-1659）等がベトナム北中部で活動し、拙公派が開かれた。また性泉湛公（1674-1744）や水月通覚（1637-1704）等をはじめとするベトナム僧も南方中国に遊学し、ベトナムに中国の禪学を伝えた。中越間の仏教交流が盛んであった社会的背景には、明末清初の混乱期にあたって、中国から南方へ渡った明遺民の存在があると、先学諸氏は指摘している。特に拙公や明行の名はベトナムでよく知られ、現在でも二名を篤く祀る所縁の寺も多い。当該時期におけるベトナム仏教の復興と中国明清仏教思想や典籍の流入については、譚志詞氏等による研究が進められており¹²⁾、以下、先学の論考をもとに拙公及び明行の行跡

11) 後黎朝以降の政権と朱子学の導入、仏教との関係については、川本邦衛「ヴェトナムの仏教」（『アジア仏教史10』4章、佼成出版社、1976年、223-303頁）、石井公成「ベトナムの仏教」（『新アジア仏教史10 漢字文化圏への広がり』7章、佼成出版社、2010年、335-391頁）及び前掲注7大西和彦「近世ベトナム仏教界と広州海幢寺」等を参照。

12) 譚志詞「『拙公語録』的編者・版本・内容及文献価値——対域外一份鮮為人知的漢文史料的初歩探討論」

を紹介する¹³⁾。

拙公、俗姓は李、法号は拙拙、福建省漳州府海澄県の人。はじめカンボジアで16年間教化活動を行った。一度福建に戻った後、1623年頃からベトナム中部の広南・順化（クアンナム省・フエ市）に入り、当時この地域を支配していた広南阮氏の尊崇を受けた。拙公とは別にベトナム入りしていた明行に出会い弟子に迎えた後、二人は北上し1630年頃ハノイに入り、後黎朝の帝室や王侯たちから尊崇を受けた。拙公は1642年頃、北寧（バクニン省）筆塔寺住持に迎えられ、1644年示寂した。

明行の俗姓は何、法号は在在、江西省建昌府の人。師の拙公と共にベトナム中部からハノイの諸寺院に逗留した後、筆塔寺に迎えられた。拙公示寂の後、明行が師の跡を継いで筆塔寺住持となり、1659年に示寂した。後黎朝はそれぞれに師号を追贈し、筆塔寺は現在でも拙公と明行を初代・第二代の祖師として木像を奉じている。またその法系は拙公禅派と称されおよそ200年にわたって伝承された。

拙公及び明行は筆塔寺に入る以前の1634年頃、北寧省仏跡寺（ファッティック寺）に一時迎えられた。当時、後黎朝の実権を握っていたのは鄭氏政権の鄭柎（1577-1657）であった。二人の支援者でもあった鄭柎の要請を受けて、明行はこの頃典籍収集のため中国に一旦戻っている。明行がこの時ベトナムに将来した典籍や、これらを底本として刊行されたベトナム版の仏典についての全体像は不詳であるが、確実に明行が編述したことが明らかな典籍である『三経日誦』が現存している。以下、節を改めて『三経日誦』の刊行と重刊の状況について見ていく。

（『古籍整理研究学刊』2005年6期、93-97頁）、「僑僧明行禪師在越南弘揚佛法」（『八桂僑刊』2006年1期、41-44頁）、「十七・十八世紀嶺南与越南的仏教交流」（『世界宗教研究』2007年3期、42-52頁）等。これに先立つ研究として、Nguyễn Lang, *Việt Nam Phật Giáo Sử Luận*, vol.2, Sai Gon, 1973. (グエン・ラン『ベトナム仏教史論』2、1973年、ただし筆者が参照したのは2008年ハノイ文学出版社の全3巻合冊本)の20章「竹林門派の復興」（533-564頁）等がある。

13) 関連する資料に、明行集『拙公語録』及び二名が晩年住持を勤めた、バクニン省筆塔寺（ブッタップ寺、正式な寺名は寧福寺）の碑文等がある。

(3) 『三経日誦』（『仏祖三経』）のベトナム初刊と重刊

禅宗では、『四十二章経』¹⁴ 『仏遺教経』¹⁵ 『滄山警策』¹⁶ の三經典を合わせて『仏祖三経』と呼び、特に尊重した。この三経が編集されて一書となった経緯は明らかではないが、北宋末から南宋初にかけての禅学僧・守遂（1072-1147）が各経に対し作成した註解が最もよく知られている。守遂の註解本は『仏祖三経註』一巻として刊行されたが、中国ではその刊本は全く伝わらない¹⁷。一方、朝鮮や日本では中国元代の版本を底本とした『仏祖三経註』が幾度も重刊されて、広く流布していた¹⁸。

これまでの『仏祖三経』研究上では全く注目されてこなかったが、ベトナムでも本経は『三経日誦』として刊行され、後には書名を『仏祖三経』に改めて重刊したものが現存している¹⁹。以下に、『三経日誦』の大まかな構成内容を提示する。なお版式は一定せず序文等の各部によってそれぞれ異なるが、守遂註の本文部分の行格は9行18字で、頭注形式及び割注形式を併用する。

①廬陵居士欧陽穎侄題「三経日誦叙」

②盱江雲水沙弥积在在撰「仏祖三経序」

14) 『四十二章経』一巻は古来、後漢時代に迦葉摩騰と竺法蘭が訳出した最初の漢訳仏典と伝えられる。ただし現行の『四十二章経』は東晋代頃の成立と見られている。『大正新脩大蔵経』（以下、『大正蔵』と記す）巻17等に所載。

15) 『仏遺教経』は後秦・鳩摩羅什訳『仏垂般涅槃略説教誡経』一巻の通称。仏陀が入滅前に説いた最後の教誡とされる。『大正蔵』巻12等に所載。

16) 『滄山警策』は、禅宗五家の一つ滄仰宗の祖師である唐・滄山靈祐（771-853）の語録。後述する守遂の註解本を始めとする数種の注釈書が『大日本統蔵経』（以下、『統蔵』と記す）等に所載。

17) 守遂の三経に対する註解は、各大蔵経中にそれぞれ独立して収められている。例えば『統蔵』では守遂註、明・了童補註『四十二章経註』（No.554）、同『仏遺教経補註』（No.551）、守遂註『滄山警策註』（No.1224）を載録する。また『仏祖三経』の註解本は、守遂以降にも数本あり、特に明末清初の福建僧である為霖道霈の『仏祖三経指南』三巻は『統蔵』に一書として載録されている（No.560）。

18) 椎名宏雄『『仏祖三経註』の成立と諸本』（『印度学仏教学研究』47巻1号、1998年、28-33頁）。なおベトナム版『三経日誦』『仏祖三経』と朝・日版の同書との比較検討については、稿を改めて論ずる予定である。

19) 現存する『三経日誦』及びその重刊本である『仏祖三経』は、『越南仏典略編』に「三経日用誦」一部（AC.341）が載録され、『越南目録提要』には漢喃研究院所蔵「三経日誦」一部（AC.545）と同所蔵「仏祖三経」二部（AC.341とAC.621）が載録されるが、AC.341が両目録で異なる書名で記録される等やや混乱が見られる。またベトナム国家図書館蔵「三経日誦」一部（R.2038）、ハノイ勝教寺所蔵本中にも「三経日誦」一部（TN.059）と「三経日用」一部（TN.121）があり、書名は異なるが内容は同一である。また筆者が現在調査しているバクザン省ボーダー寺（補陀寺）所蔵典籍中にも「三経日誦」三部、「仏祖三経」一部を確認している。なお前掲注12所載、譚志詞「十七・十八世紀嶺南与越南的仏教交流」に挙げる「十七・十八世紀越南对中国仏教典籍的刊印（含重刊・重抄）情况表」中にも『三経日誦』の書名が見えるが、譚氏は詳細については不明とする。

- ③刊記：明命十一年（1830）、臨濟正宗沙門清和積在在証刊、上福県報国寺藏板
 ④本文部分：守遂註「四十二章経」「遺教経」「瀉山警策」、各所末尾に後黎・慶徳四年（1652）比丘尼妙慧善善重梓の刊記有り
 ⑤増補音釈及び阮・嗣徳十一年（1858）宝鼎識「補刊三経跋語」

④本文部分の末尾に明・永楽八年（1410）姚広孝書「三経後跋」が付されている²⁰⁾ことから、本書の底本となったのは明の版本であったと思われる。②及び③に見える「積在在」は前述の通り明行自身の法号である。①の題述を行った欧陽穎任の人物については不詳であるが、その「叙」末尾に、

余の問うらく、其の聖教を増益する所の者は誰なりや、と。或るもの曰く、盱江の在在なり、と。余、其の学を見て其の行を美しとし、敬して之が為に叙す²¹⁾。

とあることから、明行と面識があり、越版刊行のために「叙」を記したことが分かる。恐らく明行は1634年頃の一時帰国の際、本書の底本を入手すると同時に、併せて欧陽穎任に序文の執筆を依頼したのであろう。

再びベトナムに戻った明行は、間もなく筆塔寺に迎えられ、拙公の示寂後は筆塔寺住持となった。筆塔寺は13世紀に創建されたと伝えられるが、当時は既に荒廃していた。鄭樞が筆塔寺の大規模な再建を行い拙公・明公を住持に迎えると、筆塔寺は一躍ベトナム北部仏教再興の中心地となったのである。のみならず、神宗の皇后で鄭樞の娘であった鄭氏玉竹や、神宗の公主である黎氏玉縁等の帝室・鄭氏ゆかりの女性達が本寺で出家したため、筆塔寺は国寺として大いに繁栄した²²⁾。鄭氏玉竹は拙公の弟子となり、黎氏玉縁は明公の弟子となった。上に挙げた

20) 姚広孝（1334-1418）は永楽帝の即位に尽力した明初の重臣であり、また道行の名を持つ学僧でもあった。その文集『独菴外集統稿』巻五には「題仏祖三経後」が載録されているが、『三経日誦』に収める「三経後跋」とは大幅に文章が異なっている。

21) 「余問、其所増益聖教者誰也。或曰、盱江在在也。余見其学而美其行、敬為之叙焉。」

22) 既にベトナムの中世である李・陳朝期から、帝室の女性と仏教の関係は深かった。熱心な仏教信者で多くの寺院を建立し、死後は火葬に附されたという李・仁宗の生母靈仁皇太后を始めとして、多くの事例が確認される。桃木至朗『中世大越国家の成立と変容』（大阪大学出版会、2011年）5章及び7章参照。17世紀の仏教復興を支えたのも本文に見たような鄭氏玉竹等の後宮の女性たちであった。石井公成『東アジア仏教史』（岩波新書、2019年）228頁参照。仏書刊行事業において表立って女性の名が確認されるのは本論で挙げる妙慧（黎氏玉縁）のみであるが、様々なベトナム刊行典籍に見られる芳名録類には、僧俗や身分を問わず多くの女性が名を連ねており、寄進という形で仏書刊行に参画していたことが伺える。

4. 守遂註「仏祖三経」本文部分の末尾に見える刊記に「比丘尼妙慧善善重梓」と記されているのは、この黎氏玉縁の法号である。明行が自身の齋した『仏祖三経』の底本をもとに監修し、黎氏玉縁すなわち妙慧が『三経日誦』の刊行を実質的に主催したのであろう。刊記に拠ればその年代は慶徳四年（1652）であるが、②釈在在（明行）「仏祖三経序」の末尾には「天運癸巳年盱江雲水沙弥釈在在撰」の紀年がある。翌慶徳五年（1653）が癸巳年にあたるため、実際に本書が刊行されたのはこの年以降であろう。この明行自身の序文には、越版刊行に関する直接的な言及は見られないものの、「然此三経、日誦者衆而知因者寡」との句があり、『三経日誦』の書名の由来ではないかと思われる²³⁾。またこの時期は、明行が筆塔寺の住持を継いだ後であり、開版の場所も恐らく筆塔寺であった。

しかし現存する『三経日誦』の版本は、残念ながら慶徳年の初刻時のものではない。②釈在在「序」の後に付された③刊記の全文を以下に挙げる通り、阮・明命十一年（1830）に上福県報国寺（ハノイ市南方、現在のトゥオンティン県平望寺）において開版された刊本に、後掲する補刻を加えた嗣徳十一年（1858）のものである。



【参考資料1：バクザン省補陀寺所蔵、嗣徳十一年（1858）
重刊『三経日誦』刊記及び「註仏祖三経序」首頁】

華林寺臨濟正宗沙門清和釈在在証刊

仏子宝蓮重刊

23) 本書の書題となっている「三経日誦」の句が見えるのは、本箇所と欧陽穎任「三経日誦叙」の題、同「叙」中の「持三経日誦与余、觀余曰善、……」のみである。

明命十一年歳在庚寅十二月初八日告成
 弟子宝鼎比丘
 板留在上福県平望村報国寺以暁後印

一行目とそれ以下では時系列が異なる。「積在在証刊」は、明行・妙慧による初刊時のもの、二行目以下については明命年の重刊時のものである。さらに現存『三経日誦』の巻末には、⑤「増補音釈」及び阮朝・嗣徳十一年（1858）多宝宝鼎識「補刊三経跋語」が付されており、重刊の状況について述べている。参考のために「補刊三経跋語」全文を以下に挙げる（改行及び下線は筆者による）。

三経之行久矣、昔我本師住持上福之報国寺、崇刻未果而顧命、余時於此繼灯而成之、
爾來不覺応命于富川之多宝寺、乃我隊山第五葉祖師之芳躅也、又亦我本師之梓里也、争奈
 從縁鳩工鼎革、歴念春秋、
 而程工課役稍舒、迺因乘隙、与其徒觀読、于中案外、不知所従、
 然歟適有文具行者、別有古本、正文註語上層小註瞭如、遂欣然細閲再三、而補刻之、間有
不揣掛漏、窃附己意、遂行而傍加小字、与夫隨所見聞、而附音釈于卷末、古來別三準次、
 致常使人茫然、今則合一準次、以便其初学耳、若其幸符聖旨、惟願永保流通、倘所未平、
 望垂訂正、和南敬白、
 嗣徳十一年歳次戊午五月下旬多宝宝鼎識

報国寺住持であった宝鼎の師は、『三経日誦』の刻版を志したが果たせず、師の遺囑を受けた宝鼎がこの事業を継いで完成させた。これが上掲の刊記三行目「明命十一年十二月初八日告成」版であり、二行目に「仏子宝蓮重刊」と見えるのが師の名であろう。後に宝鼎は富川県多宝寺（報国寺の約30キロ南方、現在のハノイ市ティンチ県多宝寺）住持に遷った。改めて本書を読むと文中に混乱や誤り（案外）があった。そこで宝鼎自身が別本を参照して補刻を加え、巻末に音釈を付したという。

管見の限りこの嗣徳増補版『三経日誦』より古い版本は現存しない²⁴⁾ため、実際に宝鼎が底本とした版本や、校訂に使用したという「古本」について詳細は不明である。本書本文部分に

24) 前註18に挙げた勝巖寺所蔵本のうち一本（TN.121）は姚広孝「三経後跋」が最終葉となっており、「増補音釈」「補刊三経跋語」を欠く。本書は明命十一年（1830）初版時の刊本の可能性もあるが、他の嗣徳増補版諸本と本文中に相違する点が見当たらないため判断し難い。

は、前述の通り頭注及び割注が付される他、行間にも小字による校勘が付されており、或いは宝鼎の補刻はこの行間の小字を指すものか。これらの注釈類や「増補音釈」の分析は、ベトナム仏教の思想や文化を明らかにする手がかりとなるであろうが、ここでは深く立ち入らない。ひとまず本章では、ベトナム版『三経日誦』の刊行過程の考察を通じて、明末清初の動乱期に南遊した中国僧によって将来された仏典が、ベトナムで版を改めて刊行され、また再刊が重ねられたこと、その際にも単に既存の典籍を覆刻刊行したり序跋を加えるだけではなく、別本を用いた校訂や注釈の整理、「増補音釈」に見られるような独自の要素を付加する等の積極的な編集を行っていたことを指摘しておきたい。

2 ベトナム刊行仏典の独自性——ベトナム版『仏祖統紀』の刊行

前章に見た通り、現存ベトナム刊行仏典の大本の底本となったのは、17-18世紀に将来された中国仏教典籍であった。それらの典籍がベトナムで「初刻」された後、阮朝前半期の明命（1820-1840）から嗣徳（1848-1883）年間にかけてを中心に再び仏典刊行が盛んに行われた。この時期には無論ベトナムにおいて未刊行の典籍やベトナム僧による著作の「初刻」もなされたが、『三経日誦』の例に見たように後黎朝期の刊行仏典の再刊もまた重要な事業であった。本章では当時、北部仏教界の重鎮として活躍した福田和尚安禪（1784-1863）の手掛けた仏典刊行事業のうち『仏祖統紀』を例に、ベトナム刊行仏典の独自性について考察する。

(1) 安禪の仏典刊行事業

福田和尚安禪（1784-1863）は、ベトナム北部各地の寺院で住持を勤めつつ、仏教典籍の刊行事業のほか『三教源流』に代表される多くの著述活動を行い、朝廷から「刀牒」（戒刀と度牒）を賜る等、当時の北部仏教界を支えた高僧であった。

ベトナム仏教史を把握する上で、安禪の著作のうち最も重要なのは『大南禅苑継灯略録』二巻である。安禪は本書上巻に、李朝以前の仏教史書である『禅苑集英』²⁵⁾を再録し、下巻には『禅苑集英』以降の仏教史書、すなわち陳朝竹林禅派の三祖師の伝記『三祖実録』、後黎朝末期の如山禅師撰『御製禅苑統要継灯録』（1734年刊）と安禪自ら加筆した幾人かの僧伝及び寺伝を編集し、嗣徳十二年（1859）に刊行した²⁶⁾。安禪の加筆部分には安禪自身の伝も含まれている。そ

25) 前掲注4参照。

26) 以下に挙げる通り、本書には安禪伝も載録され安禪の死に至るまで記述があるため、さらに後人による加筆があると考えられる。本書の伝来には不明な点も多い。前掲注12、Nguyễn Lang, *Việt Nam Phật Giáo Sử Luận*, vol.1, Sai Gon, 1973. (ゲン・ラーン『ベトナム仏教史論』1、1973年)の4章『『禅苑集英語録』と

れに拠ると、安禪は河内省応和府山明県（ハノイ市南方ウンホア県）の人、俗性は武氏、十二歳で出家し幾つかの寺院での修行を経た後、明命二十一年（1840）にバクニン省蒲山寺（大覚寺）に入った。これ以降、安禪はバクニン省やハノイ周辺の大寺で教化活動を行うかたわら、仏典刊行にも注力して多くの成果を上げた。『継灯略録』安禪伝には、彼が刊行した典籍を挙げて、

於紹治三年癸卯（1843）、復於山西省開化富兒寺、銳村黃雲寺、重刻經錄各款、
 花嚴經方本一部八十卷・新輯諸經日誦函一集・新輯禪家經呪各款一卷・新輯禪家比丘尼戒律各款一卷・新輯大南禪苑繼燈各款一集・新輯三教管窺儒積道三卷・新輯放生儀一卷・新輯小瑜伽一卷・新輯在家修持三教源流三卷・新輯五戒十戒牒一張・重刻大戒牒一引・新輯祈安禳星牒十二引・新輯陰魂牒十二張・訂梓仏祖統紀寫為方冊一部二十卷・重刻禪苑集英一集・重刻日本仏祖繼燈三卷・刊刻演国音護法論一卷・刊刻竹窓国音三卷・刊刻禪林宝訓国音四卷・刊刻課虛録国音一卷・刊刻菜根潭国音一卷・各諸事跡一卷、
 以上各板留在蒲山寺・蓮尊寺

という。「新輯」とあるものは安禪が新たに編纂したもの、「重刻」は既にベトナムで刊行されていた版本の重刊、「刊刻」はベトナムにおける初刊を示すものか。いずれにせよかなり規模の大きな事業であり、実際には紹治年間から嗣徳年間にかけて長期間にわたり継続されたものであろう。それらに使用された版本は前述の蒲山寺及び蓮尊寺に所蔵されているという。蓮尊寺は現在のハノイ市内の名刹蓮派寺の旧称であり、安禪が嗣徳五年（1852）頃より寺僧たちに請われて第七代住持を務めた寺である²⁷⁾。

ハノイ蓮派寺は後黎・裕宗の保泰七年（1726）に創建され、当初は蓮華寺と称したが後に蓮尊寺、阮朝期に入るとしばらくして蓮派寺と改めた。開山は如澄鄰覺（1696-1765）、また救生上士と号した臨濟派の僧であった。以後、臨濟派の高僧が代々住持し、第七代目となったのが安禪である。この蓮派寺には現在でも安禪所縁の版本が所蔵されており、中でも上掲史料に「訂梓仏祖統紀寫為方冊一部二十卷」と記された、『仏祖統紀』の版本が多くを占めている²⁸⁾。本稿

唐代ベトナム仏教に関するその他の資料」（95-110頁）参照。

27) 『継灯略録』安禪伝「嗣徳五年壬子歳二月望日、蓮尊寺忌救生祖、監寺法名清馨門徒等、同詣蓮池寺、頂礼福田和尚、併將蓮尊譜一切本寺、尽心供養而白言、……至今頽弊無余、難堪奉事、衆等力不從心、為此恭請和尚、住持蓮尊寺、經營三法、重興祖道、……咸率督工事務、募化官民、資扶福果、寔為蓮尊第七代住持。」

28) 蓮派寺の歴史については、*Chùa Liên Phái*, nxb Tôn Giáo, Hà Nội, 2009（『蓮派寺』、ハノイ宗教出版社、2009年）が最も詳しく、歴代住持の伝記や関連文献、所蔵版本の目録等を掲載する。

では、この安禅刊『仏祖統紀』に注目して、安禅の仏典刊行とその特徴について以下に述べる。

(2) ベトナム版『仏祖統紀』の刊行

『仏祖統紀』は南宋・咸淳年間（1265-1274）に天台僧の志磐が撰述した、全55巻（または54巻）の仏教史書である。志磐は、先行する南宋・祖琇の『隆興仏教編年通論』や宗鑑の『釈門正統』等の編年体の仏教史書を参考にしながら、釈迦の誕生から中国における天台の相承までを通覧する『仏祖統紀』を、紀伝体の形式によって編纂した。成書以来、『仏祖統紀』は大部でありながらもよく読まれ、東アジア地域で大いに流行し、現代においても中国仏教史研究に必須の史料として重要視されている。

『仏祖統紀』の版本系統の概要は以下の通りである²⁹⁾。まず、咸淳年間に法運通塞志15巻（仏教通史に相当する部分）を除く40巻が刊行された。この宋版40巻本は北京図書館に所蔵されている。その後、南宋末頃に法運通塞志15巻を含めた全55巻が刊行され、明代以降、多くの重刊がなされた。その系統は二つに大別される。一つは、明・太祖の勅により開板された洪武南蔵から、神宗の万暦年間に開板された嘉興蔵を経て、のち日本『大正蔵』所収本の底本となった系統である。もう一つは、同じく日本で江戸時代の17世紀に刊行された和刻本から、『統蔵』所収本の底本となった系統である。この二種の版本には文の異同が非常に多い。特に後者の『統蔵』所収本には、多くの儒教・道教関係の記事が挿入されているのが特徴的であり、こちらの方が宋版の原形に近いとみなされている。

安禅の刊行したベトナム版『仏祖統紀』³⁰⁾の原典部分の文章は、上述の洪武南蔵から『大正蔵』に至る系統の諸本に近似しており、安禅が底本としたのは、洪武南蔵や嘉興蔵、または同系統の清代重刊本であると考えられる。以下はベトナム版『仏祖統紀』の構成内容である。

- ①福田和尚略録原本・嗣徳九年（1856）浄慈膺写「南北歴代年紀」、中国及びベトナム各朝代の皇帝・在位年等を記す。
- ②嗣徳八年（1855）福田和尚沙門安禅撰「仏祖統紀新刻序」
- ③南宋・咸淳五年（1269）四明福泉沙門志磐序「仏祖統紀原序」、『大正蔵』等他の版本と同じ
- ④蒲山寺沙門安禅述「仏祖統紀凡例三則」

29) 『仏祖統紀』に関する研究は数多く報告されておりここでは詳述しないが、以下に述べる版本系統の問題については特に曾谷佳光「江戸時代における『仏祖統紀』の出版」（『日本漢文学研究』4、2009年、75-100頁）を参照した。

30) 『仏祖統紀』は、漢喃研究院にAC528（完本、全7巻）及びAC251（残本）の二種が所蔵されている。

- ⑤「仏祖統紀通例」、原典に有り、本来は③志磐序の後すぐに置かれる
 ⑥「仏祖統紀凡例三則」、④と内容は同じだが若干字句が簡略化されている。④との関係は不詳。
 ⑦「仏祖統紀」巻一、以下本文部分

①②④⑥が安禪による増補部分となる。⑦「仏祖統紀」本文巻一以降、各巻巻頭には、

仏祖統紀城部巻一、
 大宋咸淳四明東湖月波福泉沙門志磐和尚撰述、
 大南黎永祐三玄門湛公和尚奉旨如清迎回梵本、
 聖朝嗣徳河内蓮池寺臨濟派刀牒福田和尚訂梓、

と題す。これに関連して、④「仏祖統紀凡例三則」には、本書流伝の経緯について以下のように述べている。

本国黎朝永祐の間（1735-1740）、河内省三玄門崇福寺臨濟派性泉杜多和尚、毎に念うらく大道寥寥たりて、戒律已に聞く無し、と。旨を奉じて大清国広東省鼎湖山慶雲禪寺に詣り、其金光端和尚に頂礼して、六年産学し、比丘菩薩戒を進受す。梵本三百余部を得て、将て本国乾安寺に回り、後世の刊刻に留伝す³¹⁾。

性泉湛公（1674-1744）は、俗姓黄氏、南定（ナムディン）省武仙県の人。蓮派寺の開祖である如澄鄰覚に師事し、師の命を受けて後黎朝の永祐年間に広東省肇慶市の鼎湖山慶雲寺に遊学した³²⁾。1章に述べたように、17-18世紀のベトナム仏教復興期に中越仏教文化の交流に重要な役割を果たしたベトナム僧の一人である。性泉湛公は六年の修行ののち帰国に際して仏典三百余部を将来してハノイ乾安寺³³⁾に安置したという。上述の各巻題記及び「三則」中ではこれを「梵本」と称するが、無論、湛公が将来したのは、インド語の仏典ではなく漢語仏典だったのであろう。言語に関わ

31) 『仏祖統紀』「凡例三則」、「本国黎朝永祐間、河内省三玄門崇福寺臨濟派性泉杜多和尚、毎念大道寥寥、戒律已無聞矣。奉旨詣大清国広東省鼎湖山慶雲禪寺、頂礼其金光端和尚、六年産学、進受比丘菩薩戒。得梵本三百余部、将回本国乾安寺、留伝後世刊刻。」

32) 性泉湛公の行歴について詳しくは前掲注11、譚志詞「十七・十八世紀嶺南与越南的仏教交流」を参照。

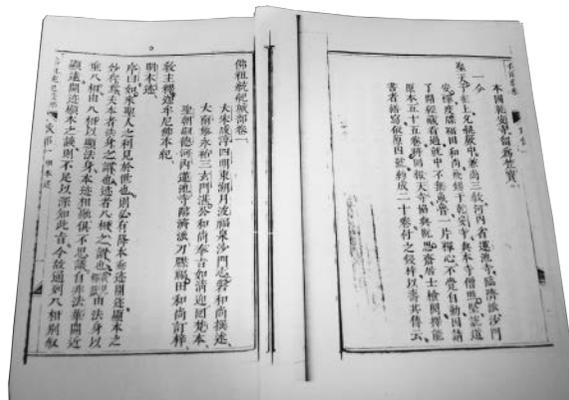
33) 乾安寺は現存しないが、ハノイ文廟の近隣にあったとされる。

らず、外国から将来した典籍を「梵本」と称していたらしいことが伺える、興味深い表現である。

湛公将来の典籍三百余部の中にあつた『仏祖統紀』を見出し、刊行にこぎ着けたのが蒲山寺沙門安禪であつた。同「三則」に述べる、

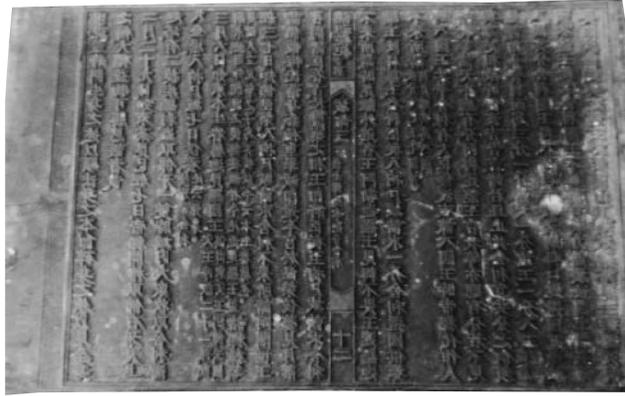
蒲山寺沙門安禪、協与居士阮得望、就乾安寺、与僧照堅説道了、開統記一部看過、見其經年蠹損、就中無不魚魯、一斤禪心、不覺自動。因請原本將回報天寺、同心檢閱、增補歷代年紀、以備考究。遂使弟子比丘法名文堂、写為方冊、依原四号約成二十卷。至癸丑年八月朔日刊刻、以寿其伝、恭請十方三宝護法諸天証明、蒲山寺沙門安禪訂梓、蒲山派門徒護念、居士丹安思齋阮得望護法、……板留在河内省白枚坊蓮派寺。

安禪が、居士阮得望や僧照堅らの協力を得て乾安寺に所蔵されていた湛公将来の『仏祖統紀』を閲覧したところ、虫害を受けて劣化しているのを見るに忍びず、ハノイ報天寺³⁴⁾に原本を持ち帰り、歴代年紀を増補する等の出版の準備に着手した。弟子の文堂に書写させ、底本の55巻を城・池・昆・碣の千字文を用いた4部計20巻に再構成した。先に挙げた巻頭題に「城部卷一」と見えるのはそのためである。嗣徳六年（癸丑・1853）に始まった刊刻は、①「南北歴代年紀」の撰述年である同九年（1856）頃に完成したと見られる。



【参考資料2：漢喃研究院所蔵、嗣徳九年（1856）『仏祖統紀』「凡例三則」及び巻一首頁】

34) 報天寺は李朝初期に創建された大寺院。のち廃絶し、跡地にはハノイ大教会が建てられた。



【参考資料3：ハノイ蓮派寺所蔵『仏祖統紀』版木】

(3) ベトナム版『仏祖統紀』の特徴と位置づけ

以上の来歴を持つベトナム版『仏祖統紀』は、その内容に関しても、他地域で刊行された同書には見られない特徴を具えている。これらはいずれも、すべて安禪自身が嗣徳年間の編纂時に加筆・修正したものであり、ベトナム版『仏祖統紀』独自の要素であるといえる。

まず、前節で述べた『仏祖統紀』冒頭に付された「南北歴代年紀」の存在がある。この「年紀」は全13葉に及び、中国部にあたる「瓊林故事東震年紀・歴代帝王総紀」では盤古氏・三皇五帝から清・咸豊六年（1856）に至る4735年間の歴代帝王の在位年数や事跡等を記す。「大南歴代年紀」ではその間のベトナムにおける歴代帝王の在位年数や改元回数、中国の元号との対象等が記されている。

また、構成の変更とそれに伴う内容の改変も見られる。前節で挙げた「仏祖統紀凡例三則」でも言及されていたように、ベトナム版『仏祖統紀』は底本の55巻を20巻に再構成した。そこで、もともと志磐の「序文」「仏祖統紀通例」の後に掲載されていた「仏祖統紀目録」が削除されている³⁵⁾。

原典からは、最終巻末尾に附せられた咸淳七年（1271）・志磐撰「刊板後記」が削除され、代わりに安禪の「統紀終帰末後句」が付加される。この他の修正点として、例えば卷三十二（ベトナム版では昆部一）「世界名体志」中に追加された安禪の文章や³⁶⁾、また仏教通史である法運

35) 正確には、「仏祖統紀通例 完」の次行に「仏祖統紀目録」の題のみ挙げられているが中身はなく、「仏祖統紀凡例三則」が直後に続いている。

36) 安禪による加筆部分は以下の通り：「東震旦地輿統紀引／普天之下、山川封域、下旋地軸、上応天文、博而觀之、則一国有其輿図約而収之、則万国都归于紙上第星辰分野、人所難知、故但然璇璣而分別其疆域、

通塞志には、中国歴代皇帝に対する事績を補足したり、原典に見られる年号の誤りを独自に修正している箇所がしばしば見られる。

上述の諸点から伺えるように、『仏祖統紀』における安禪の加筆・修正の重点は、中国及びベトナム歴代王朝・皇帝の年代と事績を明確にし、仏教史との関連づけを容易にすることにあった。前節に引用した「仏祖統紀凡例三則」中に「歴代年紀を増補し、以て考究に備う」とある通り、「南北歴代年紀」の新撰は、『仏祖統紀』を中国という外国の仏教史書としてのみ読むのではなく、ベトナムを含む仏教世界全体の歴史書として考究するための手引きとして行われたと考えられる。志磐自身が自身の撰述態度について序文中に「考史の法に依りて用て一家の法を成す」と述べており、安禪も特にこの部分を引用している³⁷⁾ことから、歴史学の考証に耐えうる正確さを『仏祖統紀』に求めていたことがわかる。

『仏祖統紀』の例に見られるように、ベトナム刊行仏典は、決して中国から将来した典籍の単なる焼き直しではなく、多くの工夫が凝らされている。従って典籍目録を用いた中国刊行仏典との書目の整理や比較だけではなく、典籍個々の内容にも注意を向け、ベトナム刊行仏典の独自の編集箇所やその特色を明らかにすることが重要である。例えば、日本における三国仏教史観のように、ベトナム人仏教者が自身を含めた仏教世界をどのように捉え、またその中にベトナム仏教をどのように位置づけていたのかに関しては不明な点が多い。筆者自身、安禪の『仏祖統紀』編纂事業とその加筆・編集内容についてはまだ分析が不十分であるが、当時のベトナム仏教界における世界観や歴史観を考察する手がかりになるだろうと考えている。

おわりに

李陳朝の全盛期から衰退しつつあったベトナム仏教は、17-18世紀にかけての明末清初の混乱期を背景とする中越仏教交流の活発化によって復興の機運が高まった。現代に至るベトナム仏教の形成に大きな役割を果たしたのは、この時期に中国から将来された典籍類であった。これらの典籍が底本となりベトナムでの「初刊」が行われた後、阮朝の明命（1820-1840）から嗣徳（1848-1883）年間にかけて再び仏典刊行事業が盛んとなり、旧版の再刻も行われた。

九十二片紙仮如軫選一函、左旋則夾張星、右旋則夾□□、從所夾之分野旁注左右、分之則為岐序、合之則為全函、務掃成摺、以便刪刻有道者一目瞭然、而不失其真、亦統紀世界之一要領也。蓮池海会禪寺刀牒福田和尚謹識。」

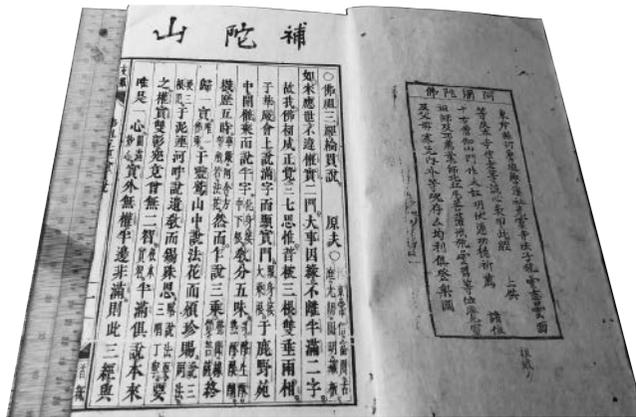
37) 『仏祖統紀』「凡例三則」、「沙門志磐……且刊且補、依考史法、兼二家之書、成一家之梵本、分為五十五卷……。」「二家」は本書に先行する仏教史書『宗源録』『釈門正統』を指す。「梵本」については本章2節を参照。

20世紀初頭に入ると、仏典刊行は再度盛行した。本論1章で取り上げた『三経日誦』は成泰十八年(1906)、明命版を手掛けた多宝寺の宝蓮・宝鼎の法系に連なる円明寺源蘊等の主催によって『仏祖三経』の名で新たに開版された³⁸⁾。この版本は、要所に成泰十八年(1906)源蘊の撰文が挿入されている他は、概ね『三経日誦』の内容を踏襲している。ただ一点、『三経日誦』冒頭に付されていた欧陽穎侄題「三経日誦叙」については、源蘊の「仏法をもてあそぶもので誤解を生じかねない³⁹⁾」との判断によって削除され、またそれに伴ってか書名も『仏祖三経』に改められた。明行がベトナムにおける『三経日誦(仏祖三経)』刊行のために欧陽穎侄に執筆を要請したであろう「三経日誦叙」は、ベトナム版『三経日誦』にとって非常に重要な要素であったと思われるが、源蘊は大胆にこれを削除したのである。本論2章で見たように、安禪のベトナム版『仏祖統紀』には様々な改変が施されていた。しかし仏典重刊の際に、内容をより良くするための加筆・修正を厭わない編纂方針は、安禪に特有の姿勢ではなく、源蘊の『仏祖三経』刊行の際にも行われたように、ベトナム仏教者にある程度共通する姿勢であったといえる。

本論では取り上げることができなかったが、ベトナム刊行仏典にはまた、非常に広範囲にわたる地域の村落名称と共に、僧侶・官僚から在俗の一般信者に至る多数の寄進者と寄進額が事細かに記録された芳名録が付されているものも多く、近世ベトナム地域社会全体で刻経事業が重要な護法活動として認識され、僧侶たちの仏典刊行を支えていた様子を伺うことができる。このように多くの独自性を持つベトナム刊行仏典については、より総合的な調査・分析を継続していく必要があり、ベトナム仏教史のみならず東アジア仏教文化交流史を考える上でも重要な資料となるであろう。

38) 現存する版本については前掲注19参照。本書は宝鼎版『三経日誦』の版式とは大幅に異なり、序跋部分や本文部分も一律10行20字、双行小字注の体裁をとっている。この10行20字の行格は『万暦版大蔵経』に範をとったもので、『仏祖三経』のように『万暦版大蔵経』に記載されていない典籍の場合でも、この頃のベトナム刊行仏典では好んで使用されていた。

39) 源蘊「仏説四十二章経章目撰頌付書体小白」「唯欧陽一題、文雖佳、念其遊戯法門、或至妄生錯解、故敬遠之。」



【参考資料 4：バクザン省補陀寺所蔵、成泰十八年（1906）『仏祖三経』首頁】

【付記】本報告は、JSPS 科研費「ベトナム北部地域における仏教典籍流通の史的 연구」（課題番号：JP 17K18251）の助成を受けて行った研究成果の一部である。